

庄内遺跡第4次発掘調査報告書

平成26年（2014年）6月30日

豊中市教育委員会

庄内遺跡第4次発掘調査報告書

平成26年（2014年）6月30日

豊中市教育委員会

序 文

庄内遺跡は、昭和2年（1927年）頃に庄内尋常高等小学校の校舎新築に伴う造成の際に発見された遺跡です。このとき出土した土器の一群は、後に出土地の地名にちなんで庄内式土器と命名され、弥生時代から古墳時代へ移行する時期の標識的な土器として、研究者の間に知られることになりました。また、これらの遺物が出土した庄内遺跡についても、注目を集めるようになりました。しかし、庄内遺跡における集落の実態が知られるようになったのは、本書でも概要を報告する第1次発掘調査が行われた昭和60年（1985年）、すなわち発見から半世紀がすぎた後のことでした。

この調査では、当初予想された弥生時代の集落のほかに、古墳時代から平安時代にかけての集落が確認されました。また、第3次発掘調査では古墳時代中期の須恵器がまとまって出土するなど、その成果には大いに関心が寄せられました。

このように、庄内遺跡は豊中市の歴史ばかりではなく、弥生時代から古墳時代への移行過程を知る上で、非常に重要な遺跡として位置付けられます。そして、その重要性を明らかにする一端になったのが、今回の調査であったと言えるでしょう。本報告書は、そうした調査成果を余す事なく提示し、将来における歴史叙述あるいはその研究に資することを目的に刊行するものです。

調査にあたっては、医療法人 善正会 上田病院をはじめとする関係者の方々に、種々のご協力を賜りました。ここに記して、厚く謝意を申し上げます。

平成26年（2014年）6月30日

豊中市教育委員会
教育長 大源文造

例　　言

1. 本書は、医療法人 善正会 上田病院（理事長 上田 正規）の病院増築に伴って実施した庄内遺跡第4次発掘調査の報告書である。
2. 本調査は、医療法人 善正会 上田病院の依頼を受けて、実施したものである。調査は、豊中市教育委員会事務局 地域教育振興室 文化財保護チーム 主査 橋田 正徳が担当した。
3. 本調査は、豊中市庄内辛町4丁目8-1他9筆のうち、57.5m²を調査範囲とした。発掘調査の期間は、平成25年（2013年）12月16日から平成26年（2014年）1月20日で、発掘調査報告書の作成にいたる遺物整理期間は平成26年（2014年）6月30日までとした。
4. 本報告では、第4次発掘調査の成果をより明確にするため、医療法人 善正会 上田病院建設に伴って実施された第1・2次調査の概要も併せて掲載した。
5. 本報告で示した挿図中の北位は座標北（国十座標第VI系）と磁北を使用している。このうち、磁北については方位に、M.Nと表記した。
6. 本報告で表記した土層色は、『新版標準土色帖 1994年度』に準拠するものである。
7. 第4次発掘調査に関するすべての成果は、豊中市教育委員会において管理・保管している。

目 次

第Ⅰ章 調査にいたる経緯と経過	
1. 調査にいたる経緯と経過	1
第Ⅱ章 遺跡の環境	
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
第Ⅲ章 既往の発掘調査	
1. 第1・2次発掘調査の概要	7
第Ⅳ章 発掘調査の成果	
1. 基本層序	9
2. 検出した遺構と出土遺物	11
第Ⅴ章 総 括	
1. 集落の性格に関する現時点での所見	14

挿図目次

第1図 調査地位置図	2
第2図 調査範囲図	2
第3図 市内遺跡分布図	5
第4図 調査地点と周辺の地形	6
第5図 第1次調査区平面図	7
第6図 第2次調査区平面図	8
第7図 遺物包含層（遺構埋土）出土遺物	9
第8図 第4次調査区平面・断面図	10
第9図 柱穴出土遺物	11
第10図 溝1・2出土遺物	12
第11図 土坑出土遺物	13

図版目次

- | | | | |
|-----|-----------------|-----|-------------------|
| 図版1 | (1) 調査区(東側)全景 | 図版5 | (1) 第1次調査区1区北側 |
| | (2) 調査区(西側)全景 | | (2) 第1次調査区2区(西から) |
| 図版2 | (1) 溝2遺物出土状況 | 図版6 | (1) 第1次調査区2区(東から) |
| | (2) 溝2断面 | | (2) 第2次調査区全景 |
| 図版3 | (1) 溝1遺物出土状況 | 図版7 | (1) 第2次調査区(北から) |
| | (2) 溝1断面 | | (2) 第2次調査区(南から) |
| | (2) SP04断面 | | |
| 図版4 | (1) 第1次調査区1区南側1 | | |
| | (2) 第1次調査区1区南側2 | | |

第Ⅰ章 調査にいたる経緯と経過

1. 調査にいたる経緯と経過

庄内遺跡は、昭和2年（1927年）頃に庄内尋常高等小学校の校舎新築に伴う造成に用いる盛り土を掘削する際に、発見された遺跡である。このとき出土した土器の一群の中に、弥生時代から古墳時代へ移行する特徴をそなえた土器も含まれていた。それらの土器は、後に出土地の地名に因んで庄内式土器と命名され、研究者の間に定着することになった。しかし、遺跡が発見されたあとに本格的な発掘調査は行われず、採取された遺物から弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡であること以外に、その実態は知られていない。⁽¹⁾

そうした中、庄内幸町4丁目28-12において病院建て替えに伴う試掘調査（庄内遺跡第1次調査）が昭和60年（1985年）4月19日から5月7日まで行われた。さらに、同年12月9日から17日かけて、同病院にかかる第2期工事に伴う試掘調査が行われた。この結果、当遺跡が弥生時代終末期から古墳時代にかけて継続する集落遺跡であることを追認した。また、平成元年（1989年）に第1・2次調査地点から東方150mの地点において、共同住宅建築に伴う試掘調査（第3次調査）が行われ、⁽²⁾遺跡が東へ広がることが確認された。これらの発掘調査の結果、庄内遺跡が弥生時代終末期から古墳時代、中世前期の集落であることが再認識された。

そして、今回病院の増築に伴う埋蔵文化財発掘の届出が平成25年（2013年）11月25日に提出されたことをうけて、同月26日に確認調査が行われた。この結果、現地表下120cmのところで遺物包含層を、150cmのところで遺構面を確認し、その上面で柱穴を検出した。一方、計画中の建物は、鉄筋コンクリート造2階建てで、表層地盤改良を現地表下200cmまで行うことから、建築に伴って遺構が損壊されることは避けられないと判断された。よって、農中市教育委員会と事業者は、埋蔵文化財の記録保存を行う必要から、発掘調査の実施について協議した。その結果、平成25年（2013年）12月16日から平成26年（2014年）1月20日にかけて第4次発掘調査が行なわれることになった。

註

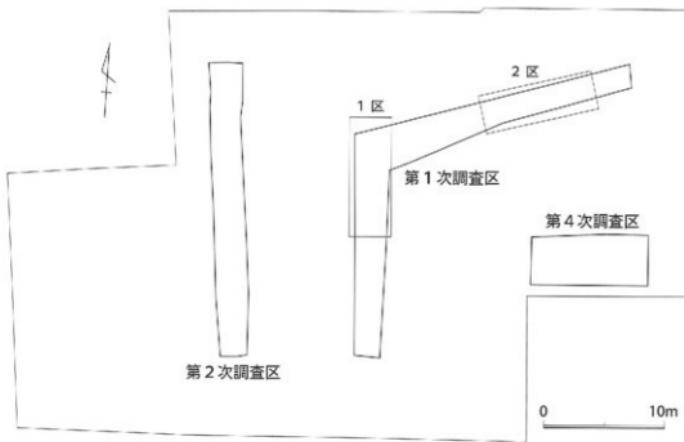
（1）農中市『新修 農中市史 第10巻 学校教育』2002年

（2）農中市『新修 農中市史 第4巻 考古』2005年

1. 調査にいたる経緯と経過



第1図 調査位置図（1：5,000）



第2図 調査範囲図（1：400）

第Ⅱ章 遺跡の環境

1. 地理的環境

豊中市は旧国では摂津国に属し、西は猪名川を挟んで兵庫県と、また南は神崎川を挟んで大阪市に接する。その市域の西と南を画する二つの河川は豊中市南西端で合流し、そして大阪湾へと注ぎ込む。特に神崎川河口の一帯は、古くより瀬戸内水運と神崎川・淀川水運が交接する流通上の要衝となり、その後背部に位置する豊中市はその恩恵を受けて発展してきた。また、豊中市の南北を縱断するように能勢街道が、猪名川流域の上津島から豊中台地中央付近に向かっては桜塚街道などが通るように、陸上交通も十分発達していたことも発展の背景にあったと推定される。

17世紀以降は都市大阪の近郊という環境のもと、市域の村落は商品作物の栽培を行うことで極めて安定的に展開する。そして、明治43年（1910年）の箕面有馬電気軌道（現在の阪急電鉄宝塚線）開通を契機に宅地化が進み、現在では約37㎢の市域に約40万人が暮らす北摂有数の住宅都市となっている。その一方で、商業都市大阪の近代化とともに、その玄関口にあたる本市には名神高速道路や阪神高速道路といった幹線道路や大阪国際空港など、陸空の交通機関が整備された。関西国際空港へ国際線が移転された現在においても、なお近代交通網における要衝の位置にあると言えよう。

一方、豊中市域の地形的特徴をみると、北から南に向かって標高が低くなること、起伏の乏しい穏やかな地形が指摘できる。市内北部の最高地点である島熊山（海拔約100m）から最も低い大島町付近（海拔1m以下）にかけての高低差は、およそ100mにとどまる。市域の北部には千里丘陵と刀根山丘陵と呼ばれる2つの丘陵（高～中位段丘）が、中部は主に千里丘陵から派生する中～低位段丘からなる豊中台地、南西部は神崎川・猪名川、その支流である天竺川などの小河川の沖積作用によって形成された平野部が広がっており、巨視的にみて三つの地形に区分できる。なお、10世紀中頃の神崎川河口である「難波浦」が豊中市洲到止・大阪市西淀川区の一带に比定されることが、古代史料をもとに解明されている。⁽¹⁾こうした豊中市域にあって、庄内遺跡は古代の神崎川河口付近の沖積地に展開する。遺跡の北西には難波津に推定されている島田遺跡・上津島南遺跡等が位置することからも、これらの遺跡とも関連する海浜に近い集落遺跡と考えられる。

2. 歴史的環境

庄内遺跡は弥生時代終末期から中世にかけての集落遺跡として周知されているが、その実態はまだ十分に把握されていない。よって、当遺跡の歴史的環境について、主に豊中市南部における各遺跡の展開から概観することにした。なお、豊中市南部において、人類の活動が追跡できるようになるのは縄文時代となるため、旧石器時代の様相は割愛する。

縄文時代 当遺跡に限らず、豊中市南部において、当該期に展開する本格的な集落は確認されていない。一方、穂積遺跡第14・15次調査区において縄文海成層から里木Ⅱ式等の縄文土器を母材とした土器片錠が出土していることから、豊中市穂積・服部の一帯まで海底にあり、さらにその南方にある庄内遺跡一帯はまだ陸地化していないことは明らかと言える。

弥生時代 豊中市南部における弥生時代前期の集落としては小曾根遺跡が挙げられる。これ以外

にも、穂積遺跡西部において弥生時代前期の遺物が採集されていることから、その一帯にも集落が存在する可能性がある。しかし、弥生時代中期の集落遺跡は先の小曾根遺跡だけで、中期後半～後期によく上津島南遺跡と服部遺跡・豊島北遺跡において集落が展開するようになる。市域北部では新免遺跡や蛭池北遺跡が出現し、中期後半には集落の数が著しく増加する傾向にあるのと比べて、対照的なあり方と言えるだろう。しかし、終末期になると、当遺跡のほかに穂積遺跡や上津島遺跡、利倉西遺跡などが新たに出現し、当遺跡と上津島南遺跡を除いて、その規模は急速に拡大する。これらの遺跡から出土した土器をみると、これまで河内などの地域に限定されていた搬入品が急増し、搬入元の範囲も西日本一帯に拡大する。また、服部遺跡では前方後円形の周溝墓が、豊島北遺跡でも円形周溝墓群がつくられ、古墳出現前夜の様相を帯びるようになる。しかし、こうした集落数の増加や集落そのものの拡大傾向は、古墳時代には見られなくなる。

古墳時代 当遺跡が本格的に展開しはじめる時期である。各調査区において古墳時代前期の遺構・遺物が確認されており、この時期に集落が拡大することは間違いない。また、上津島遺跡などの神崎川・猪名川合流域に展開する遺跡も、この時期も拡大する傾向が認められる。これに対して、平野部でも内陸に位置する穂積遺跡などでは集落の範囲が縮小しており、海浜部の集落とは異なる変遷を辿ることが判明している。

古墳時代後期になると、上津島南遺跡などでは大型の掘立柱建物が多く建築され、著しく繁栄する様相が看取できる。当遺跡においても、遺物の出土量が増加するなどの傾向が認められるものの、今のところ大型の掘立柱建物は確認されておらず、異なる様相を示す可能性がある。

奈良時代 この時期になると、当遺跡における遺物の出土量は減少する。しかし、近隣の島田遺跡や上津島南遺跡などは、引き続き活況を呈している。島田遺跡では第6次調査区に3間四方の大(3)型倉庫が建てられ、また第1次調査区からは重弧文軒平瓦や三彩小壺が出土し、上津島遺跡第6次調査区では難波宮6013形式の重巻文軒丸瓦や柱間3間四方の大型倉庫が確認されており、難波津に推定される流通拠点の様相は明確になる。

平安時代 当遺跡におけるこの時代の遺構は非常に少ない。また、10世紀以降の遺物は採取されていないため、古墳時代に展開した集落は10世紀までに廃絶した可能性がある。また、島田遺跡・上津島遺跡などでは、この時期に遺構が急激に減少することが確認されている。なお、瓦器碗など中世前期の遺物が各調査区で出土しているが、その出土量は少なく、11世紀後半以降は建物群が散在する程度と予想される。

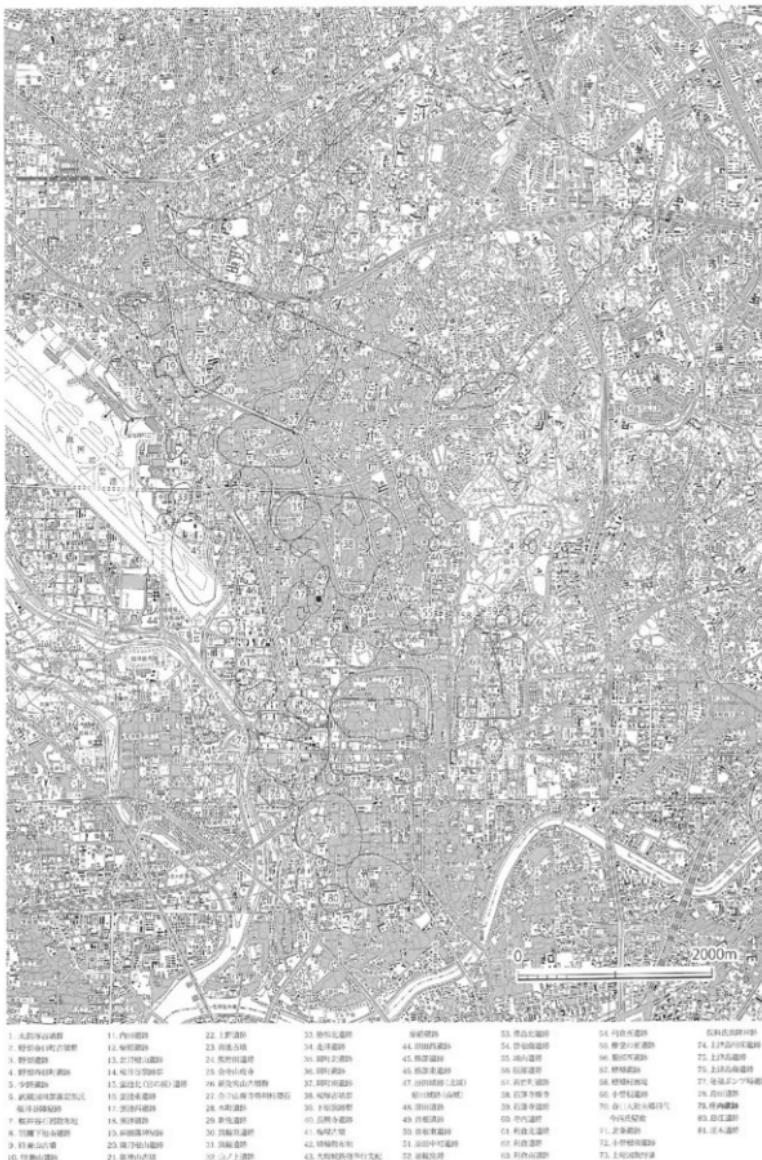
註

(1) 橋田 正徳「難波津から河尻へ—中世の流通構造の成立過程—」『古文化談叢』第70集 2013年

(2) 豊中市教育委員会『穂積遺跡第14次・15次発掘調査報告』1999年

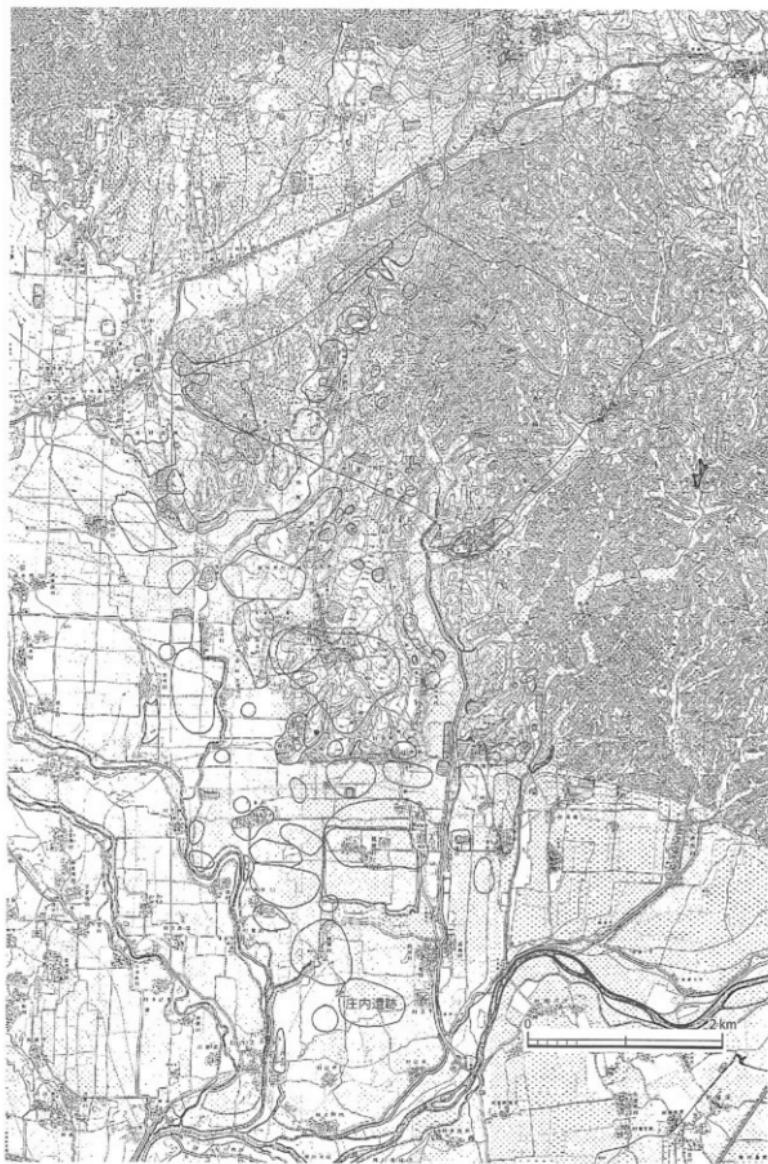
(3) 豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1989年度』1990年

(4) 豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財年報 vol. 6』1999年



第3図 市内遺跡分布図

2. 歷史的環境



第4図 調査地点と周辺の地形

第Ⅲ章 既往の発掘調査

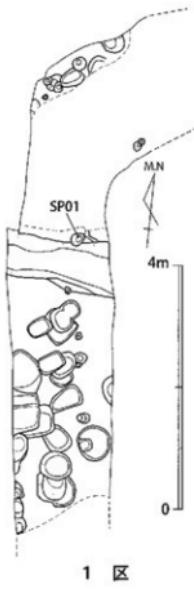
1. 第1・2次発掘調査の概要

ここでは、第4次調査区に隣接する第1次・第2次調査区の成果について、その概要を述べることにする。

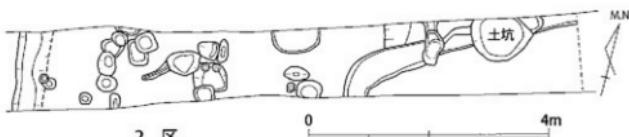
調査区の状況 第1次調査区は、既設建物の基礎によって搅乱されており、遺構面の保存状態は不良であった。このため、本来の状況は把握しにくい。また第1次・第2次調査区はともにトレンチ調査のため、遺構の多くは部分的に検出されただけで、柱穴から建物を復元することはできなかった。以上の状況をふまえて、各調査区で検出した遺構の様相を紹介する。

第1次調査区 第1次調査区は先に述べたように、遺構の保存状態は不良であるものの、多数の柱穴をはじめ、溝や土坑などを検出した。これらの遺構のほとんどは、出土した遺物から古墳時代中期から後期に歸属することが確認された。ただし、1区で検出したSP01は弥生時代終末期の所産であり、集落出現期の遺構と位置付けられる可能性が高い。また、柱穴・溝から出土した遺物の中で製塙土器、土鍤が目立つ。これら製塙土器・土鍤のうち、遺物の時期が正確に把握できたものは少ないが、6世紀前半の柱穴・溝から出土したものがある。なお、搬入品は河内産と考えられる布留式土器甕が1点出土しているだけにとどまる。

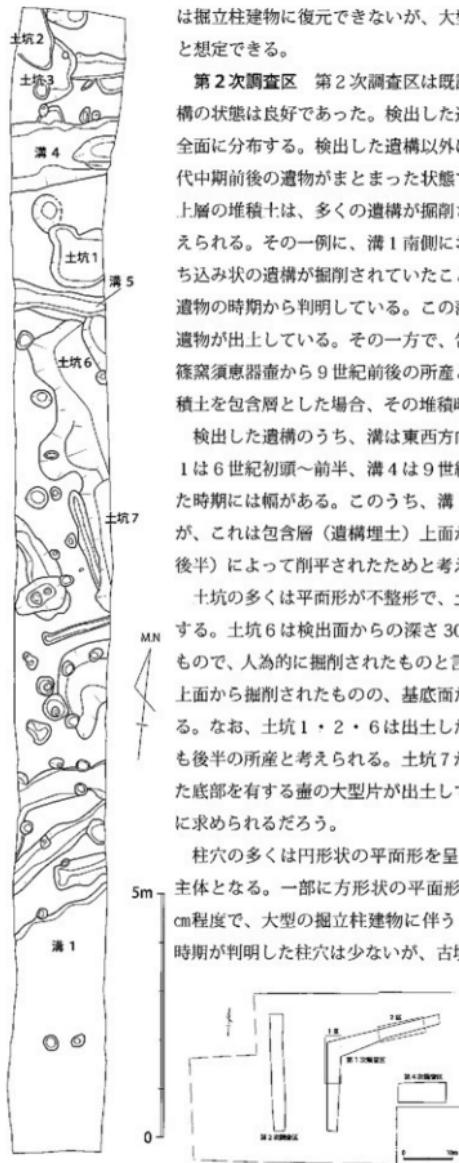
溝は3条ほど検出したが、方向性などに共通性は認められず、堆積土については土層の註記が簡素なため検討できない。このため、その性格は不明である。また、2区で検出した土坑は、深さ10cm程度の浅い落ち込み状の遺構であり、井戸等とは異なる。柱穴は平面形が方形のものと円形のものが混在する。その規模は1辺あるいは直径が30～50cm程度であり、1mを越える大型のものは確認されなかった。柱穴



1 区



第5図 第1次調査区平面図（1/80）



第6図 第2次調査区平面図（1/100）

は掘立柱建物に復元できないが、大型建物が周囲に存在する可能性は乏しいと想定できる。

第2次調査区 第2次調査区は既設建物による遺構面の損壊は少なく、遺構の状態は良好であった。検出した遺構は土坑・溝・柱穴で、調査区のほぼ全面に分布する。検出した遺構以外にも、遺構面上層の堆積土からは古墳時代中期前後の遺物がまとまった状態で出土しており、包含層とされる遺構面上層の堆積土は、多くの遺構が掘削されて重複した結果、形成したものと考えられる。その一例に、溝1南側において、包含層（遺構埋土）上面から落ち込み状の遺構が掘削されていたことが、調査区壁面の土層断面および出土遺物の時期から判明している。この落ち込み状の遺構からは、6世紀後半の遺物が出土している。その一方で、包含層直下で検出した溝4は、出土した篠窯須恵器壺から9世紀前後の所産となる。このことから、遺構面上層の堆積土を包含層とした場合、その堆積時期に齟齬が生じることになる。

検出した遺構のうち、溝は東西方向に掘削されたものが多い。しかし、溝1は6世紀初頭～前半、溝4は9世紀前後、溝5は6世紀前半で、掘削された時期には幅がある。このうち、溝1の南側の掘形は図上に示されていないが、これは包含層（遺構埋土）上面から掘削された落ち込み状遺構（6世紀後半）によって削平されたためと考えられる。

土坑の多くは平面形が不整形で、土坑6以外は浅い落ち込み状の形態を呈する。土坑6は検出面からの深さ30cm前後をはかり、明確な掘形を呈するもので、人為的に掘削されたものと言える。それ以外は、包含層（遺構埋土）上面から掘削されたものの、基底面だけを基盤層上面で検出した可能性がある。なお、土坑1・2・6は出土した在地産の土師器から、古墳時代前期でも後半の所産と考えられる。土坑7からは、球頭状の体部に円盤状の突出した底部を有する壺の大型片が出土しており、弥生時代終末期～古墳時代前期に求められるだろう。

柱穴の多くは円形状の平面形を呈し、直径20～40cmの中小型のものが主体となる。一部に方形状の平面形を呈するものもあるが、1辺40～50cm程度で、大型の掘立柱建物に伴うと考えられるものは検出されていない。時期が判明した柱穴は少ないが、古墳時代中期～後期が主体を占め、弥生時代終末期・奈良時代以降のものは確認されなかった。

なお、第2次調査区では製塩土器はあまり出土していないが、土鍤は土坑2や包含層（遺構埋土）から出土している。また、搬入品は出土していない点は、第1次調査区と共に通す。

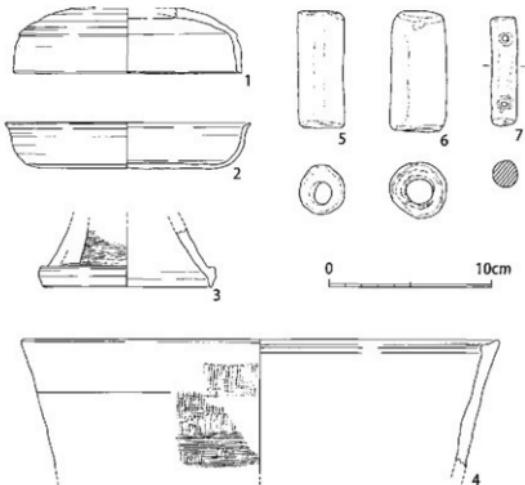
第IV章 発掘調査の成果

1. 基本層序

当調査区における基本層序は、盛り土・耕作土・遺物包含層・基盤層によって構成される。現地表から0.75m下までは盛り土、その直下に宅地造成以前の耕作土及び土壌を検出した。土壌の下には暗紫灰色極細粒砂を主体とする遺物包含層が堆積する。この遺物包含層は溝、土坑等の遺構が重複することで形成したものであることが、調査区壁面の土層観察から判明している。当遺跡は沖積地に立地するにもかかわらず、遺物包含層上に中世から近世の水成層が確認されていない点は、他の遺跡における層序と大きく異なる。また、現地表から1.2m前後のところで均質な明灰白色極細粒砂からなる基盤層が確認されたが、調査区の北側ではその直上に、この基盤層を母材とする整地層が検出された。検出部分における整地層の層厚は0.15m前後で、土器器細片が含まれる。この整地層が竪穴住居に伴うものか、判然としないが、集落形成時における大規模な造成も考慮する必要がある。

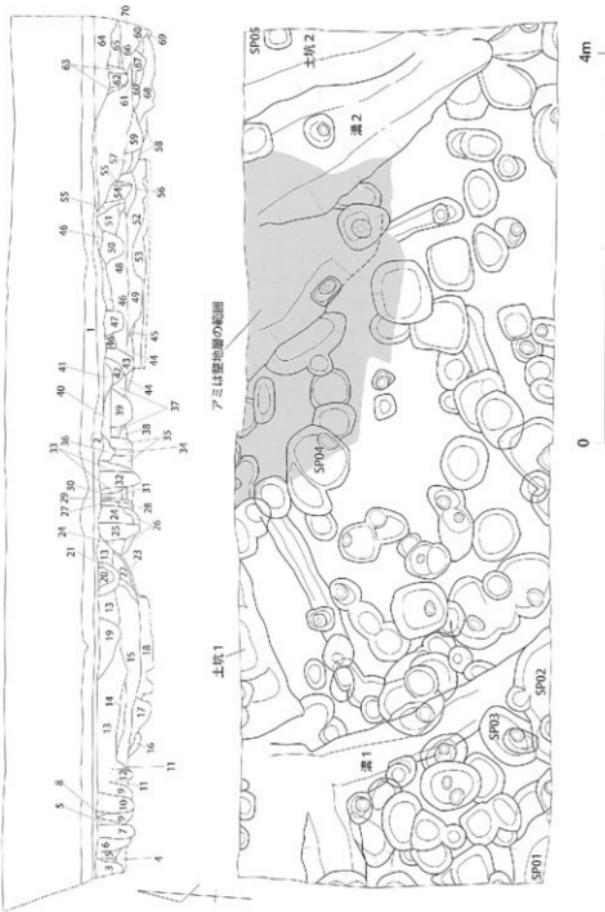
遺物包含層(造構埋土)からは第7図の遺物などが出土した。1は須恵器杯蓋である。口径14.0cm、残存高4.0cmをはかる。天井部外面に回転ヘラケズリを施す以外は、回転ナデである。2は土師器杯Aである。口径15.0cm、器高2.8cmをはかる。内面および口縁部外面には横ナデを施すが、底部外面には押圧痕が残る。口縁部は外反するが、端部に段は巡らされていない。3は、須恵器脚部である。裾部径10.4cm、残存高3.6cmをはかる。裾部端から内面は回転ナデを、裾部外面にはカキメを施す。裾部に、方形もしくは長方形状の透かしがある。4は須恵器顛である。口径29.0cm、残存高7.8cmをはかる。口縁部外面から内面には横ナデを、体部外面にはカキメを施すが、口縁部側にはタタキ痕が残る。口縁端部はナデにより、平坦面を形成している。5～7は土鍤で、5・6は円筒状、7は棒状の形態を呈する。5は全長7.1cm、直径2.8cmをはかる。6は全長7.3cm、直径3.5cmをはかる。7は全長6.7cm、直径1.5cmをはかる。

当調査区で出土した遺物のうち、2の都城系土師器杯が最新の遺物とな



第7図 遺物包含層(造構埋土)出土遺物(1/3)

1. 基本編序



第8図 第4次調査区平面・断面図（1/50）

1. 耕作土
 2. 床土
 3. 青灰色 (Hue5PB5/1) 植被较少 土壌碎片を少量含む。炭化物を微量含む。
 4. 黄灰～青灰色 (Hue5PB5/1 ~ 525/1) 植被较多
 5. 黄灰～青灰色 (Hue10R5/1 ~ 525/1) 植被较少 土壌碎片を微量含む。
 6. 細粒砂～青灰色 (Hue5PA4/1 ~ 545/1) 植被～細胞砂
 7. 細粒砂～青灰色 (Hue5P4/1 ~ 535/1) 細胞～細胞砂 中空部を含む。土壌碎片を少量含む。
 8. 灰白色 (Hue5BS5/1) 細胞～細胞砂
 9. 灰灰色 (Hue5P5/1) 細胞砂 土壌碎片を微量含む。
 10. 無灰～青灰色 (Hue5P5/1 ~ 525/1) 細胞～細胞砂
 11. 灰灰色 (Hue5PB4/1) 植被较少シルト
 12. 黑灰色 (Hue5PB5/1) シルト～細胞砂 粗粒砂を多く含む。基盤砂ブロックを少量含む。
 13. 青灰色 (Hue5B5/1) 細～細胞砂 土壌碎片を微量含む。
 14. 雾青灰色 (Hue5PB4/1) 細～細胞砂 土壌碎片を含む。土壌碎片・炭化物を微量含む。
- 草叢心。
15. 驚異灰色～細胞砂 (Hue5PB4/1) 少量砂を含む。土壌碎片・炭化物を微量含む。基盤砂ブロックを含む。
 16. 黑白色シルト (Hue7.5V5/1) 基盤砂ブロックに、灰白 (Hue5S) 基盤砂を含む。
 17. 黑色 (Hue5S) 細胞砂 細胞砂ブロックを多く含む。
 18. 黑白色シルト (Hue7.5V5/1) 基盤砂ブロックに、灰白 (Hue5S) 基盤砂を含む。
 19. オリーブ灰色 (Hue7.5GY5/1) 細胞砂～二層砂片・炭化物を微量含む。
 20. 青灰色 (Hue5B5/1) 細胞～細砂 炭化物を微量含む。
 21. 灰白色 (Hue5PB5/1 ~ 525/1) 細胞砂 土壌碎片・炭化物を微量含む。
 22. 灰青灰色 (Hue5PB4/1) 細胞砂
 23. 青灰色 (Hue5B5/1) シルト～細细胞砂
 24. 黑青灰～細颗粒灰 (Hue5PB4/1 ~ 5P3/1) 土壌碎片・炭化物を微量含む。
 25. 黑白自シルト (Hue7.5V5/1) 基盤砂ブロックに、黒灰灰色 (Hue5PB4/1) 細胞砂を含む。上層細砂を微量含む。

26. 灰色シルト (Hue7.5YR6/1・基盤層ブロック) に、灰色 (HueN5/) 埋積砂～粘
土質粘砂を含む。
27. 青灰褐色 (Hue5PB4/1) 極細～粗粒砂 土器片を極少量含む。
28. 露天色 (Hue10YR6/1) 極細粒砂 灰化物を極少量含む。
29. 青灰褐色 (Hue5PBS7/1) シルト～極細長砂 上部細片を極少量含む。
30. 露天色 (Hue5PB5/1) シルト～極細長砂
31. 青灰褐色 (Hue5P4/1) 埋積砂
32. 青灰褐色～細颗粒灰 (Hue5PB5/1～5P4/1) 細繊維砂 加の下部に水質粘土を
含む。
33. 青灰褐色～細颗粒灰 (Hue5PB5/1～5P4/1) シルト～極細長砂 中粒砂を含む。
34. 青灰褐色 (Hue5PB5/1) 埋積砂 粘土質を含む。 土質細か・灰化物を極少量
含む。
35. 細颗粒灰 (Hue5P4/1) 土器片・灰化物を極少量含む。
36. 青灰褐色 (Hue5PB6/1) 埋積砂
37. 明顯灰 (Hue10G7/1) 粘土～粗粒砂
38. 細颗粒灰 (Hue5PB4/1) シルト～粗粒砂 上部砂を含む。
39. 細颗粒灰 (Hue5PB4/1～5/1) 粘土～粗粒砂 土器片を極少量含む。
40. オリーブ灰 (Hue2.5GY6/1) 粘土～粗粒砂 土器片を極少量含む。
41. 灰色 (Hue5Y5/1) 粗粒砂 土器片を含む。
42. 細颗粒灰 (Hue5PB4/1) 粗粒砂 土器片・灰化物を極少量含む。
43. 細颗粒灰 (Hue5P4/1) 埋積砂 土器片を極少量含む。
44. 可塑灰 (Hue5PB4/1) シルト～粗粒砂 土器片を含む。
45. 灰色 (HueN6/) シルト～極細長砂 基盤層ブロックを多く含む。
46. 青灰褐色 (Hue5PB6/1) シルト 土器片を極少量含む。
47. 青灰褐色 (Hue10G6/1) 埋積砂 土器片を極少量含む。
48. 灰色 (Hue10Y6/1) 粗粒砂 灰化物を極少量含む。
49. 灰色 (HueN5/) 粗粒砂～シルト 基盤層ブロックを多く含む。端の上部に土
器片を多く含む。灰化物を含む。
50. 青灰褐色 (Hue10G6/1) 極細粒砂 土器片を多く含む。灰化物を含む。
51. 青灰褐色 (Hue10G7/1) 粗粒砂
52. 青灰褐色 (Hue10YR6/1) シルト～極細長砂 灰化物を極少量含む。
53. 灰色シルト (Hue7.5YR6/1・基盤層ブロック) に灰色 (HueN5/) 埋積砂を極
少量含む。非塑性粘土。
54. 灰色 (Hue10Y6/2) シルト～粗粒砂 灰化物を極少量含む。
55. 明顯灰 (Hue5G7/1) シルト 土器片を極少量含む。
56. 灰色 (HueN5/) 粗粒砂 灰化物を極少量含む。
57. 露天色 (Hue10YR5/1) 粘土～粗粒砂
58. 灰色 (HueN5/～7) 粗粒砂 基盤層ブロックを多く含む。
59. 青灰褐色 (HueN5/1) 埋積砂 灰化物を極少量含む。
60. 灰色 (HueN4/) 粗粒砂 灰化物を極少量含む。
61. 灰色～青色 (Hue7.5Y7/1～6/1) 端下部に土器片を多く含む。
62. 青灰褐色 (Hue5PB6/1) 埋積砂 土器片を極少量含む。
63. 青灰褐色 (Hue5PB6/1) 埋積砂
64. 露天色 (Hue5G8/1) 粗粒砂 土器片・灰化物を極少量含む。
65. 灰色 (Hue5Y6/1) 粗粒砂 灰化物を極少量含む。
66. 灰色 (Hue5Y6/1) 粗粒砂～シルト
67. 灰色 (HueN6/) シルト～埋積砂 上部砂を極少量含む。
68. 灰色 (HueN5/) シルト～極細長砂 土器片を極少量含む。基盤層ブロックを多
く含む。
69. 黑色 (HueN1.5/) 灰化物塊

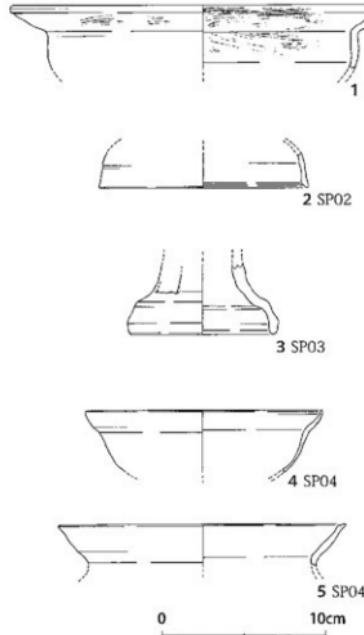
るが、他にこの時期の遺物は出土していない。また、第2次調査区溝4が9世紀前後の遺構となる以外に、8世紀以降の遺構・遺物はみられない。よって、当調査区周辺における集落は古墳時代に盛期を迎えるものの、奈良時代には衰退すると推測できる。

2. 検出した遺構と出土遺物

柱穴 調査区の全域で柱穴を検出した。これらの多くは、埋土が基盤層の二次堆積であることから、整地層上面では検出できなかつたものもある。柱穴の時期は古墳時代中期から後期までが中心となるが、遺構埋土から8世紀の遺物が出土していることをふまると、奈良時代まで継続すると考えられる。また、調査範囲が限定されている一方で、柱穴の分布密度は非常に濃密であるため、掘立柱建物は復元できなかった。柱穴の平面形は方形のものと円形のものが混在する。また、1辺1m前後の大型のものは認められないことから、周囲に大型の掘立柱建物や倉庫等は存在しする可能性は乏しい。このことは、第1・2次調査区と共に通す。

柱穴から出土した遺物は、第9図にしめした。

1はSP01から出土した土師器である。口

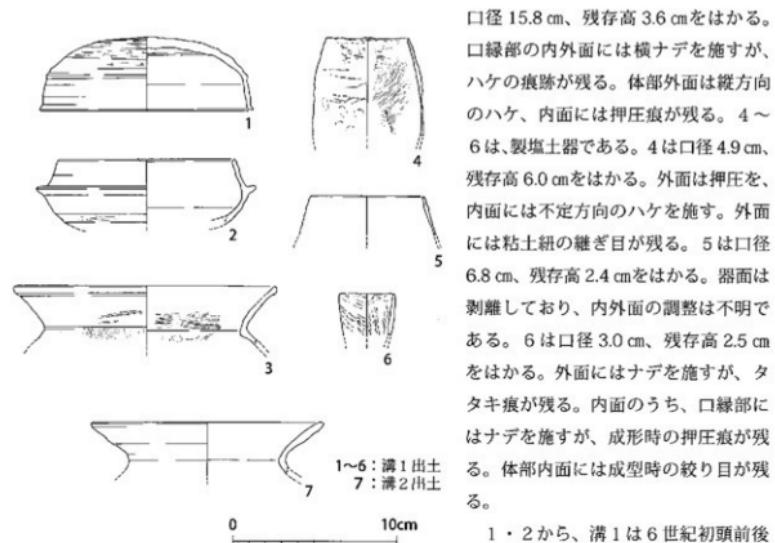


第9図 柱穴出土遺物 (1/3)

径が体部径を上回り、体部は扁平な器形を呈すると予見されることから、蓋とするよりは大型の鉢もしくは鍋と言える。口径 23.0 cm、残存高 4.0 cm をはかる。口縁部は横ハケのち横ナデを施すが、端部内面にはナデではなく、ハケがそのまま残る。体部内面にはハケを、外面は不明である。2 は SP02 から出土した須恵器杯蓋である。口径 12.8 cm、残存高 2.2 cm をはかる。口縁部内外面には回転ナデを施す。端部に段が巡るもの、鋭さに欠ける。また天井部と口縁部の境界には稜が巡るもの、ナデによって整形されているためか、不明瞭である。3 は SP03 から出土した須恵器脚部である。裾部径 8.8 cm、残存高 4.4 cm をはかる。外面に、回転ナデを施す。また、裾部中位に穿孔されるが、形状は方形もしくは長方形とする以外は不明である。4・5 は SP04 から出土した。4 は土師器鉢である。口径 14.6 cm、残存高 3.8 cm をはかる。器面は摩耗しており、調整は不明である。5 は土師器甕である。口径 17.6 cm、残存高 2.6 cm をはかる。器面は剥離しており、調整は不明である。口縁端部には段が巡る。

溝 1 調査区西部で検出した南北方向に掘削された溝である。検出面では幅 0.5 m、深さ 0.2 m 前後をはかる。遺構埋土上面から掘削されているため、実際の規模はこれを上回る。埋土は灰色細粒砂を主体とするが、下層に炭化物が層状に堆積する。この層からは製塙土器がまとめて出土したが、図化できたものは少ない。溝 1 から出土した遺物は、第 10 図 1～6 である。

1 は須恵器杯蓋である。口径 13.0 cm、器高 4.5 cm をはかる。天井部は回転ヘラケズリ、口縁部は回転ナデを施す。天井部と口縁部の境界に巡る稜は鋭さに欠ける。2 は須恵器坏身である。口径 10.6 cm、受部径 13.4 cm、残存高 4.0 cm 以上をはかる。口縁部から体部にかけては回転ナデ、底部には回転ヘラケズリを施す。口縁端部には段がなく、受部も鋭さに欠ける。3 は土師器甕である。



第 10 図 溝 1・2 出土遺物 (1/3)

口径 15.8 cm、残存高 3.6 cm をはかる。口縁部の内外面には横ナデを施すが、ハケの痕跡が残る。体部外面は縦方向のハケ、内面には押圧痕が残る。4～6 は、製塙土器である。4 は口径 4.9 cm、残存高 6.0 cm をはかる。外面は押圧を、内面には不定方向のハケを施す。外面には粘土紐の雜目が残る。5 は口径 6.8 cm、残存高 2.4 cm をはかる。器面は剥離しており、内外面の調整は不明である。6 は口径 3.0 cm、残存高 2.5 cm をはかる。外面にはナデを施すが、タタキ痕が残る。内面のうち、口縁部にはナデを施すが、成形時の押圧痕が残る。体部内面には成形時の較り目が残る。

1・2 から、溝 1 は 6 世紀初頭前後の所産と言える。

溝 2 調査区東部で検出した南北方向に掘削された溝である。検出面では最大幅 1.2 m、深さ 0.3 m 前後をはかる。遺構上面は土坑 2 によって削平されている。中層は焼却灰と考えられる炭化物を極めて多く含む灰色極細粒砂層で土器が多く出土したが、保存状態は悪く、実測できなかった。最下層には炭化物と基盤層ブロックが多く含まれることから、溝が水路として機能した可能性は乏しい。出土した遺物から、古墳時代中期の所産と言える。

溝 2 から出土した遺物のうち、図化できたのは第 10 図 7 の土師器蓋に限られる。7 は口径 14.2 cm、残存高 3.3 cm をはかる。器面は摩耗しており、調整は不明である。

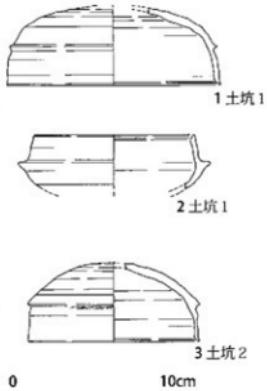
土坑 1 調査区北側で検出した土坑で、方形もしくは長方形の平面形を呈すると考えられる。検出部分のうち、東西 1.7 m 以上、南北 0.7 m 以上をはかる。基底面は起伏が激しく、深さは一定ではないが、最深部は遺構埋上面から 0.6 m をはかる。埋土は青灰色～暗青灰色極細粒砂を主体とし、最下層には 10 ~ 20 cm 大の基盤層ブロックが堆積する。中層から遺物が出土しているが、いずれも破片であり、出土状況にまとめることはなかった。

土坑 1 は平面形から竪穴住居の可能性もあるが、壁溝などは検出されなかった。なお、土坑の主軸方向は溝 1・2 とほぼ同じである。

土坑 1 からは第 11 図 1・2 が出土した。1 は須恵器杯蓋である。口径 13.0 cm、残存高 4.7 cm をはかる。天井部外面は回転ヘラケズリ、口縁部および内面は回転ナデを施す。口縁端部に明瞭な段が巡る。天井部と口縁部の境界に巡る稜は突出するが、鋭さにかける。2 は須恵器环身である。口径 9.8 cm、受部径 11.8 cm、残存高 3.3 cm をはかる。底部外面に回転ヘラケズリを施す以外は、回転ナデである。口縁端部には明瞭な段が巡る。これらの遺物から、土坑 1 は 6 世紀前半頃の所産と言える。

土坑 2 調査区東端で検出した土坑で、溝 2 を削平する。平面形状は明確ではない。検出部分から、南北 2 m 以上、東西 1 m 以上をはかることは確実である。基底面上から直径 0.26 m、深さ 0.18 cm をはかり、円形状の平面形を呈する柱穴 (SP05) を検出していること、下層は張り床の可能性もある基盤層ブロックを多く含む堆積土が認められることから、竪穴住居の可能性もある。

土坑 2 からは、第 11 図 3 が出土した。3 は須恵器杯蓋である。口径 10.4 cm、器高 4.8 cm をはかる。天井部外面に回転ヘラケズリを施す以外は、回転ナデである。口縁端部には比較的緩やかな段が巡る。天井部と口縁部の境界にある稜は、口縁部側をケズリ出して整形していることが、稜下部の歪みから想定できる。出土した遺物から、土坑 2 は 6 世紀前半の所産と言える。



第 11 図 土坑出土遺物 (1 / 3)

第V章 総 括

1. 集落の性格に関する現時点での所見

庄内遺跡は弥生時代から古墳時代へ転換する時期の標識的な土器として知られる「庄内式土器」の、その型式名称の由来となった遺跡として、古くから知られる遺跡である。しかし、当病院の建築に伴って昭和 60 年（1985 年）に発掘調査が行われるまで、その実態は全く把握されていなかった。また、第 1 ~ 3 次発掘調査はトレーナー調査のため、集落の状況は十分明確にされたわけではなく、遺跡の実態はまだ不明といって過言ではない。ここでは、このような状況をもとに、第 1 ・ 2 次調査区の所見も含めながら、当調査の成果を総括する。

まず、今回の調査も調査範囲が限定されているため、建物等は復元できなかった。しかし、柱穴が密集するなど、当遺跡における集落が古墳時代前期から後期にかけて、長期にわたって活況を呈したことが推定できるようになった。ただし、検出した柱穴に 1 辻 1 m を超えるような大型のものがない点は、難波津を構成する島田遺跡や上津島遺跡、上津島南遺跡とは異なる。また、奈良時代から平安時代にかけて継続するものの、古墳時代に比べて低調であることも、先に比較した近隣の諸遺跡とは大きく異なる。出土遺物をみると、土錘と製塩土器が多い点が当調査区および第 1 ・ 2 次調査区の特徴として特筆できる。これらの遺物から、遺跡は当時の海浜部近くに立地する集落であり、漁業が重要な生業であったと予想できる。なお、製塩土器については近辺における製塩作業に伴うものなのか、遠隔地との交換による所産となるのか、判然としない。この点は遺跡の性格を考える上で、重要な課題となるだろう。また、遺跡発見の際に採取された遺物に、河内産の甕と山陰系の鼓型器台が含まれており、搬入品が全く出土していないわけではないが、第 1 ・ 2 次調査区の遺物を含めて、近隣の諸遺跡と比べて非常に少ない。このような遺物の様相が集落全体の特徴となるのか、まだ確定できないが、現段階では流通拠点の一角を構成する集落とは言いがたい。

当遺跡は、地形的に島田遺跡と深く関連する集落と考えてきたが、その特徴や消長に共通する部分は少ない。現時点では、海浜部近くの集落とする以外は、近隣の遺跡とは性格が異なる遺跡として位置付けた方がよいものと考えられる。

庄内遺跡における発掘調査は 4 次にとどまり、遺跡の性格を確定するにはまだ情報が少ない。よって、今後とも周辺における開発にあたっては、埋蔵文化財の保護に留意する必要があることを提言する。

図 版



(1) 調査区(東側) 全景



(2) 調査区(西側) 全景

図版 2



(1) 溝2遺物出土状況



(2) 溝2断面



(1) 溝1 遺物出土状況



(2) 溝1 断面



(3) SP04 断面

図版 4



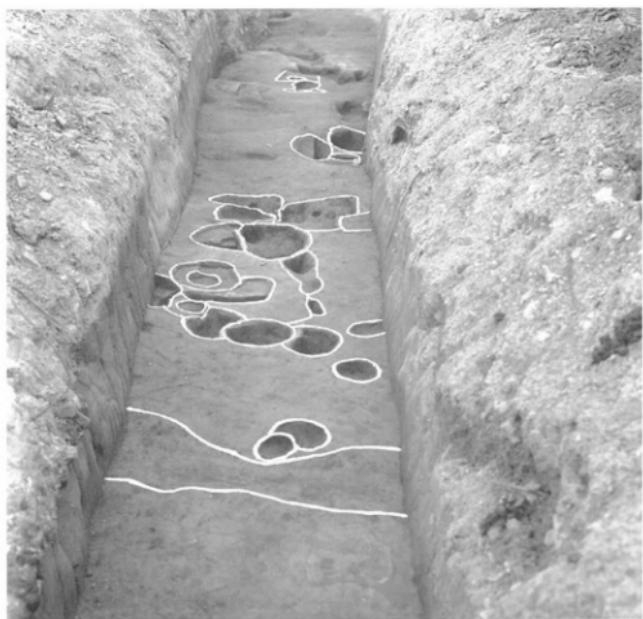
(1) 第1次調査区1区南側1



(2) 第1次調査区1区南側2



(2) 第1次調査区1区北側

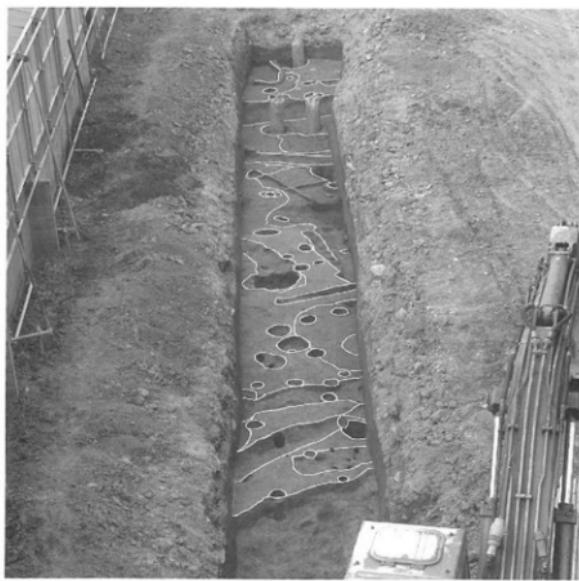


(1) 第1次調査区2区（西から）

図版 6



(1) 第1次調査区2区（東から）



(2) 第2次調査区全景



(1) 第2次調査区（北から）



(2) 第2次調査区（南から）

報告書抄録

ふりがな	しょうないいせきだいよじはくつちょうさほうこくしょ					
書名	庄内遺跡第4次発掘調査報告書					
副書名						
編著者	橋田正徳					
編集機関	豊中市教育委員会事務局（市町村コード27208）					
所在地	〒561-8501 大阪府豊中市中桜塚3丁目1-1 TEL06-6858-2581					
発行年月日	平成26年（2014年）6月30日					
所収遺跡	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
庄内遺跡 第4次調査	庄内幸町4丁目8-1他5筆	34°44'38"	135°28'21"	2013.12.16～ 2014.01.20	57.5 m ²	病院増築

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
庄内遺跡 第4次調査	集落跡	弥生～古墳 平安～鎌倉	柱穴・土坑・溝	土師器・須恵器等	弥生～古墳時代の集落、製塙土器・土窯が多く出土した。集落は漁村の可能性がある。

庄内遺跡第4次発掘調査報告書

発行：豊中市教育委員会

豊中市中桜塚3丁目1-1

平成26年（2014年）6月30日

印刷：やまかつ株式会社
